

中国人中上級日本語学習者コーパスによる 漢語サ変動詞の習得研究

張建華

要旨 本研究は、「日本語学習者書き言葉コーパス」に基づき、中国人学習者が産出した漢語サ変動詞の実態を調査、分析した。その結果、中国人学習者の漢語サ変動詞の正用率が高く、母語からの正の転移が強いことが明らかにされた。また、学習者の習熟度が漢語習得に貢献していることが確認できた。一方、中日両言語の文法的ズレ、意味的ズレおよび文体的ズレは、中国人学習者の漢語サ変動詞の習得における乗り越え難い難関であることがわかった。これから、日本語教育では、より漢語語彙の教育に力を入れて、学習者が独学で漢語語彙を勉強できるように、教科書や辞書を改良し、よりよい学習環境をつくる必要があると考えられる。

キーワード 漢語サ変動詞 日本語学習者コーパス 中上級レベル 誤用分析

基于中高级中国日语学习者语料库的汉语动词习得研究

概要 本研究基于「日语学习者书面语料库」,对中国日语学习者产出的汉语动词进行了调查分析,结果表明,中国学习者汉语动词正确使用率很高,母语正迁移较大。同时也证实了学习者的日语水平对汉语动词习得有帮助。此外,中日两语言之间的语法、语义、语体的差异是学习者在汉语动词习得上的难点。今后日语教育要在汉语词汇上加大力度,改善教科书和词典,为学习者自学汉语词汇,创造更加良好的学习环境。

关键词 汉语动词 日语学习者语料库 中高级水平 误用分析

はじめに

中国語と日本語は言語系統的には異なる言語であるが、漢字という共通の表記媒体を持つため、両言語間に多量の漢字語を生み出している。菱沼(1983)は、日本語と中国語の漢字の字体の微妙な違いを無視すれば、漢字の約98.1%は既知のものであると指摘している。宮島(1993)は『例解国語辞典』を調べたところ、漢語が53.6%を占めていることが明らかになった。漢語は日本語の語彙全体の中で非常に高い割合を占めることから、日本語の学習において重要な項目となっている。一方、漢語は中日両言語で表記と意味の類似度が高いという性質を持つので、中国語話者学習者にとって、習得しやすい語彙であると言われている。そのため、中国語の知識に頼りすぎて、しばしば母語から干渉されるということも報告されている(陳2003; 加藤2005; 河住2005; 張2008, 2009; 熊・玉岡・早川2017など)。これまで、中国語話者の学習者を対象に、漢語の意味、用法について、誤用研究や習得研究が行われ、数多くの研究成果を得られた。これらの研究を見ると、漢語の意味、文法の判断テストやアンケート調査による研究が多く、学習者が実際にどのように漢語を使用するか、習得の過程にどのような特徴が見られるか、習得の難点は何であるかといったような習得の実態に関する研究は、管見の限り、まだ少ないようである。したがって、本研究においては、先行研究の知見を踏まえ、中国人日本語学習者コーパスに基づき、学習者の漢語習得の実態を調査し、各学習段階における習得上の特徴を明らかにし、さらにコーパスに見られる誤用を分析し、誤りの原因を探りたい。

1. 先行研究と問題の所在

これまで、中国語母語話者の学習者の漢語習得については、意味と用法からの考察が数多く見られた。漢語の意味に焦点を当てた研究として、陳(2003)や加藤(2005)などがあげられる。陳(2003)は、中国語母語話者の日本語学習者を対象に、4タイプの漢語(同義語、類義語、異義語、脱落

語)の難易度について、漢語の適切な翻訳を選ぶ四者択一テストを用いて調査した。その結果、同義語が最も得点が高く、異義語は最も得点が低いことがわかった。加藤(2005)は母語転移に焦点を当て、中国語母語話者と英語母語話者の日本語学習者を対象に、文中にある漢語が日本語として正しいかどうかという意味の判断テストを行った。調査の結果として、S語(同形同義語)では、母語から正の転移、D語(同形異義語)では母語から負の転移が起こると予測された。それに対し、O語(同形類義語)の場合は、中国人の上級学習者も習得しにくく、英語母語話者と同様に難しいことがわかった。

漢語の文法的ズレに焦点を当てた研究には、石・王(1983)、張(2008)、熊・玉岡・早川(2017)などがある。石・王(1983)は中日同形同義語の習得について、4年間から7年間の学習歴を持つ中国人学習者20人を対象に、同形同義語を50語選び、アンケート調査を行った。その結果、自動詞であるものを形容詞と間違えて使ったり、中国語で受動態で用いられる動詞を、そのまま日本語の受動態に置き換えたりする傾向が見られたので、同形同義語の品詞使用が母語から強く干渉されると結論付けている。張(2008)は「日本語能力試験」の4級から1級までの同形語を用いて文法性判断テストを作成し、上級または超上級の中国人日本語学習者24人を対象に調査した。結果として、日本語が動詞で、中国語が名詞である場合は、正答率が最も高いのに対し、日本語が名詞で、中国語が動詞または形容詞である場合は、正答率が低いことがわかった。熊・玉岡・早川(2017)は「中日同形同義語の品詞の習得状況と、日本語の語彙知識と文法知識が学習者の品詞習得への影響を検討した」。中国の大学で日本語を専攻する2年生と3年生合計165名を対象に調査を行った結果、異なるタイプの品詞性の習得状況に大きな違いが見られ、それは「中国語との品詞の対応関係に起因する」と述べた。また、分析の結果から、「日本語の語彙と文法知識が(中略)5つのタイプの同形同義語を文レベルで運用するのに貢献している」(熊・玉岡・早川2017)と指摘している。

以上、中日同形語の意味および文法に関する習得研究を概観した。上述したように、中国人学習者を対象とする同形語の習得研究が数多く見られ、こ

これらの研究で得られた習得の難易度への予測や、学習の難点に関する分析などは信頼性が高く、大いに評価されるべきである。一方、調査対象者の人数が限られるうえに、調査の項目が少なく、研究対象とする同形語の数も極めて限られたために、必ずしも習得の実態が明らかにされているとは言い難い。しかも、学習者は単語レベルで意味が理解できても、実際に文レベルで産出する際、複雑な要素が絡まってきて、さまざまな誤用が生じる可能性がある。したがって、本研究は、先行研究の知見および問題を踏まえ、日本語学習者コーパスに基づいて、日本語習熟度の異なる学習者が実際に産出した漢語を比較調査し、漢語運用の実態を把握したうえで、誤用の原因を探り、習得過程における特徴を明らかにしたい。

2. 研究課題と研究方法

2.1 研究課題

本研究では、主として中日同形語の中の2字漢語サ変動詞（以下、漢語サ変動詞と略す）に対象を絞って調査を行うこととする。「心配、厄介、返事」などのような和製漢語を取り扱わない。

上述したように、本研究の目的は、日本語学習者コーパスに基づき、習熟度の異なる学習者が産出した漢語サ変動詞を調査し、習得の実態及び習得過程における特徴を明らかにすることにあるので、調査にあたり、以下の研究課題を設定する。

- 1) 学習者の文章において、漢語サ変動詞の運用実態がどのようなものか。
- 2) 異なるレベルの学習者が産出した漢語サ変動詞にどのような特徴が見られるか。
- 3) 学習者が漢語サ変動詞の習得において、どのような誤りをおかしやすいか、その原因は何か。

2.2 調査資料

本研究では、上海交通大学「日本語学習者書き言葉コーパス」¹⁾から、習熟度別に大学2年次第一学期（以下、x3と略す）の作文393件を、大学3年次第一学期（以下、x5と略す）の作文383件をそれぞれ抽出し、調査資料とする。これらの作文は、作文の授業で学習者に書いてもらったものか、または作文授業の宿題として書かれたものである。いずれの場合においても、辞書の使用は自由であった。また、抽出されたすべての作文について、日本人教師が添削を加え、それに中国人日本語教師が添削に基づき、誤用タグをつけ加えた。学習者の日本語レベルについて言えば、x3グループとx5グループの学習者は、作文を書く時点で、すでに日本語能力試験の2級および1級が済んでいたもので、日本語の中級レベルと上級レベルに相当すると考えられる。

表1 調査資料の内訳

グループ	人数	作文件数	総語数
x3	33	393	93,783
x5	111	383	151,310
合計	144	776	245,093

2.3 調査方法

本研究の目的に応じて、まず、「日本語学習者書き言葉コーパス」から抽出された作文のテキストについて、南瓜 (CaboCha) を用いて係り受け解析を行う。次に係り受け解析済みの作文のデータを「茶器」(ChaKi.NET)²⁾に

1) 「日本語学習者書き言葉コーパス」(<https://tesol.sjtu.edu.cn/index.php/Public/login>) は「上海交通大学文科系科研創新基金」「上海交通大学外国語学院学科創新育成項目」による研究成果である。このコーパスには中国国内にある5つの大学で日本語を専攻する学生が書いた作文が取り、表記、文法及び文体などの誤用タグが付与されている。作者は大学2年生から4年生までで、日本語の習熟度は、中級から上級までに相当する。(張建華・么恩鵬2020: 289-304を参照)

2) 奈良先端科学技術大学院大学で開発されたコーパス管理ツール。URL: <http://sourceforge.jp/projects/chaki/>

格納し、「茶器」内の WordList で漢語サ変動詞を抽出する。最後に人手で抽出された漢語サ変動詞から研究範囲外のものを除去し、語彙リストを作り上げる。除去の作業をする際、日本語の辞書『学研国語大辞典』と中国語の辞書『現代汉语词典』を参照しながら行った。

3. 2グループにおける漢語サ変動詞の使用実態

3.1 使用語数の統計

学習者の作文に漢語サ変動詞がどれぐらい使用されているか、2グループの作文を調べると、表2に示されているとおりでである。

表2 2グループに見られる漢語サ変動詞

グループ	延べ語数	異なり語数	TTR ³⁾
x3	3119	412	13.21%
x5	3877	381	9.83%

表2を見ると、延べ語数では、x5 (3877語) がx3 (3119語) より総語数が多いのに対し、異なり語数では、x3 (412語) の方がx5 (381語) より語の数が多い。2グループのTTR値を比べると、x3は13.21%、x5は9.83%で、x3の方が漢語サ変動詞の種類が多く使用されることが明らかである。一般的に学習者の習熟度が上がるとともに、目標言語に関する知識が豊かになり、語彙の数も徐々に増えてくるが、調査では逆の結果が得られた。それは、おそらく日本語初中級レベルの学習者はまだ日本語の既習知識が少なく、基本語彙が身につけていないため、日本語で自分の意志を伝えようとする際、母語を日本語の漢語に置き換えがちだからであろう。学習者が上級レベルになると、語彙量が増えてくるにつれ、作文に和語の使用も増加した結果、漢語の使用率が減っていくようである (大塚・李暉洙2001: 33-45)。

3) TTR値 (Type/Token Ratio) は、テキスト内の語彙密度 (或いは語彙多様性) を量的に表現する指標である。詳細は石川慎一郎 (2012: 143-144) を参照。

3.2 語彙の難易度

学習者の語彙習得は、普通、難易度の低い高頻度語から難易度の高い低頻度語へと習得していく傾向がある。漢語サ変動詞の習得には、同じような特徴が見られるだろうか。本研究では、2グループに使用された漢語サ変動詞の難易度を調査するために、インターネット上で公開している「日本語読解学習支援システム リーディング・チュウ太」⁴⁾を用いて、漢語サ変動詞の語彙レベルの判定を行った。具体的には、「リーディング・チュウ太」内の「語彙チェッカー」⁵⁾を用い、日本語能力試験の語彙リストに準拠した語彙レベルの判定を施した。その結果がそれぞれ表3、表4に示されている。表3を見ると、語彙レベルリストに入っていない「その他」を取り除けば、x3の延べ語数では、最も語数が多かったのは2/3級(40.53%)で、最も語数が少なかったのは「級外」(4.75%)である。2/3級>4級>5級>1級>級外という順序になっている。異なり語数の場合は、最も語数が多かったのはやはり2/3級であるが、1級と級外が逆転して、それぞれ2位と3位となり、2/3級>1級>級外>4級>5級という順位になっている。表4から、x5の漢語サ変動詞の語彙レベルの順位は、延べ語数においても、異なり語数においても、x3と変わらないことがわかる。

2グループの漢語サ変動詞の語彙レベルの分布を比べてみると(表5参照)、延べ語数においては、2グループ間に顕著な差が見られず、いずれも最も語数が多いのは2/3級で、級外は最も少ない。もともと2/3級の語彙数が他のレベルの語彙数よりも多く、それに普段からよく用いられる語彙を含んだ日常的な語彙なので、当然使用率が高い。一方、異なり語数の場合は、2グループのいずれも、難易度の高い1級と級外の語彙数が逆転して、

4) 1999年にインターネットに公開された学習支援ツールである。辞書ツールとレベル判定ツールが組み込まれている。URL: <https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/>

5) 「リーディング・チュウ太」内の語彙チェッカーは、「日本語能力試験出題基準」を判断基準にして、語彙レベルを判定するツールである。語彙レベルは1級から5級までの5つに分類され、一番易しいのが5級で、一番難しいのが1級である。なお、日本語能力試験の語彙リストに入っていないものは「級外」として取り扱われている。「級外」の難易度は1級より上である。

表3 x3グループの語彙レベルの分布

語彙レベル	延べ語数		異なり語数	
	数	割合	数	割合
N5	552	17.70%	13	3.16%
N4	887	28.44%	54	13.11%
N2/3	1264	40.53%	150	36.41%
N1	267	8.56%	115	27.91%
級外	148	4.75%	79	19.17%
その他	1	0.03%	1	0.24%
合計	3119	100.00%	412	100.00%

表4 x5グループの語彙レベルの分布

語彙レベル	延べ語数		異なり語数	
	数	割合	数	割合
N5	488	12.59%	12	3.15%
N4	1185	30.56%	47	12.34%
N2/3	1585	40.88%	142	37.27%
N1	468	12.07%	108	28.35%
級外	149	3.84%	70	18.37%
その他	2	0.05%	2	0.52%
合計	3877	100.00%	381	100.00%

表5 2グループにおける語彙レベルの分布

延べ語数				異なり語数				TTR			
順位	レベル	x3	x5	順位	レベル	x3	x5	順位	レベル	x3	x5
1	N2/3	1264	1585	1	N2/3	150	142	1	級外	53.38	46.98
2	N4	887	1185	2	N1	115	108	2	N1	43.07	23.08
3	N5	552	488	3	級外	79	70	3	N2/3	11.87	8.96
4	N1	267	468	4	N4	54	47	4	N4	6.09	3.97
5	級外	148	149	5	N5	13	12	5	N5	2.36	2.46

上位を占める。一般的には1級語彙も級外語彙も抽象度が高く、難しい語彙とされ、特に後者は教科書に載っていない未習語も多い。しかし、調査した結果は意外にx5よりx3の方が1級と級外の語彙を多く用いる（表5参照）

ことがわかった。この結果から、1級語彙と級外語彙の漢語サ変動詞は、中国人学習者にとっては本当に難しいかどうか、改めて検討する必要があるのではないかと考えさせられる。

4. 誤用の調査及び分類

4.1 正用と誤用に関する調査

本研究では、2グループの学習者が産出した漢語サ変動詞にどのような違いがあるか、異なる学習段階では漢語サ変動詞の習得にどのような特徴が見られるか、776件の作文を対象に、正用と誤用を含んだ全面的な調査を行った。その結果が表6に示されている。

表6 2グループの漢語サ変動詞の正用と誤用

	x3		x5		p 値
正用	2899	92.95%	3680	94.92%	p<0.01
誤用	220	7.05%	197	5.08%	p<0.01
合計	3119	100.00%	3877	100.00%	

まず、漢語サ変動詞の正用率をみると、x3は92.95%、x5は94.92%である。誤用率の場合では、x3は7.05%、x5は5.08%である。x3とx5の正用数と誤用数に一定の差が見られるが、いずれも正用率が高いのに対し、誤用率が低い。それは中国人学習者の漢語習得には、母語からの正の転移が強いと言える。また、日本語の習熟度が漢語サ変動詞の習得に関わりがあるかどうか、x3とx5の正用数と誤用数について、カイ二乗検定⁶⁾を行って確認したところ、正用と誤用のいずれにしても、2グループ間に顕著な差があった。x5は正用率が高く、誤用率が低いのに対し、x3は正用率が低く、誤用率が高

6) 仮説検定の一環である。本研究において、『言語研究のための統計入門』(石川慎一郎他2010)に添付されるCD-ROMにある仮説検定用Excelファイルを用いて、カイ二乗検定を行った。

いという結果を得られた。よって、学習者の習熟度が漢語サ変動詞の習得に関わっていることが明らかになった。

4.2 誤用分類の概観

これまで研究者によって、誤用に関する分類は、さまざまなものがあった。主な分類について概観する。

佐治 (1992: 104-119) では、誤用について「文字・表記の誤り」「語形の誤り」「語の意味用法の誤り」「文法上の誤り」「表現の問題」という5つの種類に分類した。河住 (2005: 53-65) では、中国人学習者の漢語語彙の誤用について、文法、文体、意味および中国語語彙使用の4種類に分類し、さらに下位分類として15項目に細分類した。張 (2009: 59-69) では、母語転移の角度から、漢語語彙の誤用を(1)「中国語にしか存在しない語彙」の完全な転移、(2)中国語の単語の意味の転移、(3)中国語の品詞性の転移という3分類をした。王 (2014) では、中日両言語における意味と品詞の対応を考慮し、誤用を「意味のみの誤用」「品詞のみの誤用」「意味と品詞における二重誤用」「共起の誤用」の4タイプに分けた。

4.3 本研究の誤用分類

木村 (1989: 12-17) は、単語には意味および形式があり、また、文の中で特定の文法的特徴と文体的特徴がそなわっている。それは「原則としてどの単語にも認められる必須的な性質である」と述べている。本研究において、先行研究の知見と単語の4つの性質を踏まえ、2グループの作文に見られる漢語サ変動詞の誤用を分類することとする。字数の制限があるので、本研究では主として意味、文法及び文体に関わる誤用に絞り、表記の誤用を別の機会に譲る。ただし、文法的側面に関わる動詞の形式や活用などの表記の誤用を文法の誤りとして扱う。分類の枠組は表7に示されるとおりである。

表7 誤用分類の枠組

上位分類	下位分類
I 文法の誤り	I A 品詞の選択
	I B ヴォイス
	I C テンス・アスペクト
	I D 語形成
	I E 語形
	I F 文型
	I G 文法的共起
II 意味の誤り	II A 全く違う意味となる
	II B コロケーションの誤り
	II C ほかの類義語との混同
	II D 意味の重複、欠落
	II E ニュアンスが異なる
	II F 意味が明確ではない
III 文体に関わる問題	III A 文体的に共起しない
	III B 古い言葉
	III C 特定分野の言葉
IV 中国語語彙の使用	中国語をそのまま使用するもの
V その他	どちらの分類にも入らないもの

5. 誤用の調査結果及び分析

5.1 誤用の調査結果

2グループの作文に見られる誤用を調査した結果、文法、意味、文体及び中国語語彙の使用に関わる問題、合計417例(表8)が見つかった。誤用の中で最も数が多かったのは、文法の誤り(263/63.07%)で、誤用全体の半分以上を占めている。次に意味の誤り(122/29.26%)、文体に関わる問題(23/5.52%)である。中国語語彙の使用(7/1.68%)が最も少なかった。

グループごとに見ると、2グループのいずれにおいても、誤用の数が最も

表8 誤用全体の統計

上位分類	誤用数	
I 文法の誤り	263	63.07%
II 意味の誤り	122	29.26%
III 文体に関わる問題	22	5.28%
IV 中国語語彙の使用	8	1.92%
V その他	2	0.48%
合計	417	100.00%

表9 各グループの誤用の統計

上位分類	x3		x5		p 値
I 文法の誤り	148	67.27%	115	58.38%	p<0.01
II 意味の誤り	57	25.91%	65	32.99%	差は有意でない
III 文体に関わる問題	8	3.64%	14	7.11%	差は有意でない
IV 中国語語彙の使用	7	3.18%	1	0.00%	p<0.01
V その他	0	0.00%	2	1.01%	
合計	220	100.00%	197	100.00%	

多いのは、文法の誤り（148/67.27%、115/58.38%）で、最も少ないのは中国語語彙の使用（7/3.18%、1/0%）であることがわかった。なお、2グループ間に顕著な差があるかどうか、カイ二乗検定を行って確認した結果、文法の誤りと中国語語彙の使用の2項目には、顕著な差が見られた。いずれもx3の方が誤用率が高いことが明らかになった。表9からは、学習者の日本語習熟度が上がるにともない、漢語サ変動詞に関する文法知識と語彙量が豊富になることが予測される。

5.2 誤用の下位分類及び分析

学習者の漢語習得では、どのような誤用をおかしやすいかについて、2グループに見られるすべての誤用を4タイプ17項目に分類し、分析を行った。

表10 文法の誤りの下位分類と統計

下位分類	誤用の数		誤用例
	x3	x5	
I A 品詞の選択	63 42.57%	37 32.17%	工業が発達ではありません（→発達していません）。 ⁷⁾ この混らん（→混らんした）世界のなかで、
I B ヴォイス	30 20.27%	36 31.30%	私たちはその話に感心された（→感心した）。 北京オリンピックを成功する（→成功させる）ために、
I C テンス・アスペクト	15 10.14%	4 3.48%	体育は国の国力の一面を体現した（→体現している）。 まじめに勉強して社会に適合する（→適合した）人材になるはずだ。
I D 語形成	12 8.11%	15 13.04%	自我保護の意識（→警戒意識）を持たなければならない。 合唱試合（→合唱コンクール）に参加いたしました。
I E 語形	7 4.73%	6 5.22%	日本語を最初に勉強始める（→勉強し始めた）時、 いつも鏡を見ながら反省すべき（→反省すべき）だ。
I F 文型	11 7.43%	8 6.96%	週に少なくとも1回外食になった（→外食していた）。 先生の授業を聞くほど先生を尊敬になった（→尊敬するようになった）。
I G 文法的共起	10 6.76%	9 7.83%	もし、あなたが道に（→を）散歩したら、気持ちがよいでしょう。 私は恩師を（→に）感謝しています。
合計	148 100.00%	115 100.00%	

5.2.1 文法の誤りの下位分類と分析

本研究では、文法の誤りについて、7項目に分類して統計した。結果が表10に示されている。

表10を見ると、全体としてx3に見られる文法の誤りの数がx5より多

7) 太字で示されるのは誤ったところ、(→)は誤りの添削である。

い。グループごとに見ると、x3では、「品詞の選択」(63/42.57%)の誤りが最も多く、誤用全体の半数近くを占めている。次に多いのは「ヴォイス」(30/20.27%)、「テンス・アスペクト」(15/10.14%)である。誤りの最も少ない項目は「語形」(7/4.73%)である。x5では、「品詞の選択」(37/32.17%)の誤りは、x3と同じく7項目の中で1位を占めている。2位は「ヴォイス」(36/31.30%)で、誤用の数がx3よりやや多い。3位は「語形成」(15/13.04%)となっている。「テンス・アスペクト」(4/3.48%)に関わる誤用は最も少なく、x3よりかなり減少していることがわかる。結果として、「品詞の選択」と「ヴォイス」に関わる誤用の数は、いずれのグループにおいても、上位二位を占めることが明らかになった。次に、「品詞の選択」と「ヴォイス」の誤用に焦点を当てて分析を試みる。

IA 品詞の選択

品詞の選択に関わる誤用の中には、動詞を用いるところで、名詞を使用してしまふ傾向が見られる。具体例を見よう。

- (1) クラスメートの皆も活躍の(→活躍する)人が多く、勉強にもまじめです。(x3, d0223, d23)⁸⁾
- (2) 科学の発展(→が発展する)につれて、昔の馬車から今の自動車に変化してきた。(x3, d0134, d32)
- (3) ここで人と交際の(→交際する)ことを勉強しなければなりません。(x3, d0044, d84)

(1)~(3)は動詞を用いるところ、名詞を使ってしまふ誤用で、2グループのいずれにも数多く見られる。そのうち、(1)は漢語サ変動詞が連体修飾語として用いられる場合の誤用である。この誤用を引き起こす原因は、おそらく中国の「動詞+的+名詞」という限定語(連体修飾語)構造を直訳したのではないかと考えられる。つまり、中国語の統語的なズレによる負の転移である。(2)は、「につれて」に動詞が前接するという用法をまだ身につけていないため、生じた誤用である。(3)は、学習者が単語の意味だけを考えて、

8) 括弧の中に学習者の学年、作文ID及び学習者IDが記されている。

日本語の文構造を考慮しなかったからであろう。

(4) 人間は練習と努力する(→努力)によって、だんだん発展してきたのだ。(x5, s0005, c20)

(4)は前述した(1)~(3)とは逆に、名詞を用いるところ、動詞を使用してしまう誤用である。漢語サ変動詞は動詞と名詞を兼用しているため、構文の他の要素との関係を考えて、名詞か動詞を選択しなければならない。(4)において、「努力」は「練習」と並列関係をなすので、名詞を選ぶべきであろう。(1)~(4)のような誤用を避けるために、教師が学習者に漢語の意味を説明するだけでなく、文法の知識や用法についても用例をあげて説明する必要がある。

(5) 二、三十年前に、大学を卒業した人は、楽で安定な(→安定した)仕事があった。(x3, d0288, d21)

(6) 中国は私の心の中で一番偉い国だが、不足な(→不足している)ところもたくさん気付いている。(x5, j1077, a54)

(7) たぶん故郷で両親は勤労に(→勤勉に)農業をやっています。(x3, d0087, d18)

(5)~(6)は、動詞を用いるところ、形容詞を使用してしまう誤用である。「不足」と「安定」は、日本語では自動詞であるのに対し、中国語では形容詞と動詞を兼用するので、文法的ズレが存在する。それに、“安定”と“不足”は中国語では形容詞の方が日常的に使用されるため、学習者が母語の知識から動詞より形容詞を選んだのではないかと考えられる。(7)の「勤労」は日本語は動詞で、中国語は形容詞であるが、学習者が両語間の品詞的ズレに気が付かず、誤用を引き起こしたのであろう。(5)~(7)のような誤用は、x3の作文だけでなく、x5の作文にもしばしば見られる。中日両言語間の品詞的ズレは、上級レベルの学習者にとっても、漢語習得における大きな障害であろう。よって、教師が漢語を教える際、学習者に両語間の文法的ズレを意識させ、相違点をはっきり説明することは、学習者の漢語習得のために役に立つと思われる。

IB ヴォイス

2 グループにヴォイスに関わる誤用が多く見られた。具体例を見てみよう。

(8) 言語学習の過程は、無味乾燥だ。毎日、朗読したり覚えたりする。蓄積ということがよく強調する (→強調される)。(x5, s0001, c02)

(9) 中国と日本の若者が皆私たちのように実際に交流することができれば、きっと相互理解が促進し (→促進され) ……。(x5, d0880, d1)

(8) 文と (9) 文は自動詞を使うところ、他動詞を使ってしまったため引き起こした誤用である。(8) の場合、「強調する」を用いると、「蓄積ということ」が主体になるので、非文法的である。(9) では「促進する」を使用したので、「理解」という概念が動作の主体となるため、非文法的な表現となってしまう。この2文はいずれも自動詞を使用すべきだが、漢語サ変動詞は自動詞と他動詞の区別がない代わりに、受動態が自動詞の働きをし、「強調される」「促進される」のように、受動態にしなければならない。しかし、学習者はこのような漢語サ変動詞に関する文法的知識が欠けているため、過ちをおかしたと考えられる。日本語教科書にこのような文法知識を載せれば、学習者のためになると考える。

(10) 信頼度が高い国は経済もよく発展される (→発展していく)。(x3, d0127, d26)

(11) このドラマを見れば、ぜったい感動される (→感動する) はずだ。(x5, d0972, d31)

(10) は漢語サ変動詞の能動態を用いるところ、受動態を使ってしまう誤りである。“发展”は中国語では「及物動詞」と「不及物動詞」⁹⁾(便宜上、以下、他動詞、自動詞と呼ぶ)を兼用しているため、能動態としても受動態としても使える。それに対し、日本語では「発展する」は自動詞であるため、

9) 中国語の文法では、目的語をとれるかどうか、またどのような目的語をとれるかによって、「及物動詞」と「不及物動詞」の二つに分類される。目的語をとれる動詞を「及物動詞」と、目的語をとれない動詞を「不及物動詞」と称す(劉月華等著1983: 94-95参照)。

能動態しか使えない。しかし、学習者が母語の影響で両語間の品詞的ズレになかなか気が付かない。(11)の「感動する」は日本語は自動詞だが、中国語は他動詞である。そこで、中国語では“被感动”とは言えるが、日本語では「感動される」とは言えない。学習者がこのような両言語の文法的ズレに気が付かずに、中国語を直訳して、誤用を引き起こす。また、2グループに使役文を使用すべきところ、能動文を使う誤用も見られる。

(12) 私は中国人として、北京オリンピックを成功する(→成功させる)のために、自分の力をささげます。(x3, d0300, d31)

(12)の「成功する」は自動詞であるため、他動詞として用いる場合、「させる」をつけて使役の形にしなければならないが、学習者は使役形にせずそのまま使ってしまう例である。

以上にあげた誤用の他に、また、可能態と能動態を間違えた誤用も見られる。中日両言語の文法的ズレが誤用を引き起こす大きな原因だと考えられる。紙幅の関係で、別の機会に譲る。

5.2.2 意味の誤りの下位分類と分析

本研究では、意味の誤りについて、6項目に分類し統計した。結果を表11に示す。

表11を見ると、x3では、「全く違う意味となる」の誤用は6項目の中で数が最も多い。その次に数が多いのは「コロケーションの誤り」、3位は「ほかの類義語との混同」である。x5では、「コロケーションの誤り」と「ほかの類義語との混同」がいずれも1位を占め、2位は「全く違う意味となる」である。全体として、x5の誤用数がx3よりやや多く、そのうち、「ほかの類義語との混同」の誤用数がかなりx3を超えている。次に少し具体的には見てみよう。

II A 全く違う意味となる

この種の誤用は、伝えたい意味が正しく伝わっていない場合である。例えば、

(13) 先日、李さんから電話があり、先生の様子をいろいろ聞かせてもらって、あの時のことを思い出し、ほんとうに感心しました(→なつかし

表11 意味の誤りの下位分類と統計

下位分類	誤用の数		誤用例
	x3	x5	
IIA 全く違う意味となる	20 35.09%	19 29.23%	ほかの人に席や道を謙譲する（→譲る）ようになるだろう。 大人たちから戦争のことを詳しく了解して（→聞く）ようになって、
II B コロケーションの誤り	17 29.82%	20 30.77%	もう一度やって、必ず成功を取る（→成功する）に相違ない。 そんなに貧窮して（→貧窮にあえいで）いる人たちによりよい生活をしてほしい。
II C ほかの類義語との混同	11 19.30%	20 30.77%	世界のために、友達にならなければなりません。一緒に合作（→協力）すべきだ。
IID 意味の重複、欠如	5 8.77%	3 4.62%	中国の過去30年の開放（→改革開放）の立派な成果を世界の人々に紹介できる。
II E ニュアンスが異なる	3 5.26%	1 1.54%	親に「歩道を渡る時信号をよく見るように」と警告（→注意）されてきた。
II F 意味が明確ではない	1 1.75%	2 3.08%	単なる言葉や勉強の中だけではなかなか勉強（→自身のものに）できない大事なものを身につけていったのである。
合計	57 100.00%	65 100.00%	

く感じました)。(x3, d0204, d2)

(14) 北京オリンピック大会が来年私の祖国——中国で召集します（開催されます)。(x3, d0329, d22)

(13)の文脈から、学習者が「感心する」を用いて、懐かしく思う気持ちを伝えたいと推測される。しかし、「感心する」の意味は、「すぐれたもの、人の心を打つものなどによって、心が深く動かされる」（精選版日本国語大辞典 <https://kotobank.jp/>) ことを表すので、学習者の伝えたい意味と違う。(14)も「召集する」は会議などのために人を集めるという意味であり、「北京オリンピック大会を開催する」ということを表すのに用いるのとは意味が異なる。これらの誤用は、皆漢語サ変動詞の意味を正しく理解していないため生じた誤用であろう。

(15) 小学生になってから、だんだん学校の教育と大人たちから戦争のことを詳しく了解して（→聞くようになって）、私にとっては本当にショックであった。(x5, d0890, d13)

(16) 一人で仕事をするにはできないので、互いに合作（→協力）すべきです。(x3, d0116, d15)

(15)の文脈から見れば、学習者が「聞く」という意味を表すところ、「了解する」を間違えて使用したと考えられる。(16)では学習者が「力を合わせて一緒に努力して仕事をする」という意味を表したかったが、「合作する」は何人か共同で一つの作品を作るという意味なので、明らかに作者の本意と異なる。(15)と(16)の誤用は中国語の“了解”“合作”をそのまま日本語にしたと考えられる誤用である。

II B コロケーションの誤り

この種の誤用を見ると、主として学習者が日本語のコロケーションに関する知識が欠けているため、中国語を直訳したり、或いは中国語を日本語に置き換えたりしたために生じた誤用である。例えば、

(17) ごみをよく收拾して（→捨って）、果皮等をごみ箱に捨てるようにします。(x3, d0264, d30)

(18) 指導者は他の人に影響を与えることによって、本当の成功を獲得しにくるのだ（→おさめることができる）。(x5, d0964, d25)

(19) 中国人として、北京オリンピックに貢献を献上したい（→貢献したい）。(x3, d0329, d22)

(17)の「ごみを收拾する」、(18)の「成功を獲得する」といった表現は中国語の“收拾垃圾”“获得成功”を直訳したもので、日本語に見られないコロケーションである。(19)の「貢献を献上する」は学習者が中国語の意味を日本語に置き換えたため、不自然な日本語の表現になった。この種の誤用は2グループのいずれにも比較的多く見られるので、教材や辞書に、漢語語彙の用法やコロケーションの用例を載せれば、学習者のために役に立つと思われる。

II C ほかの類義語との混同

この種の誤用は漢語サ変動詞の類義語の使い分けが身につけていないため、中国語を直訳したことによるものである。

(20) この韓国の留学生によると、今の中国人は以下の何点かを改正（→改善）しなければならない。(x5, j1078, a61)

(21) 市長を担任（→担当）する人は大統領の能力はない…… (x5, j1142, a68)

(22) 私は成人（→大人）になりました。こんな問題を質問すると、たぶん恥ずかしいと思うからでしょう。(x3, d0232, d33)

(20)の誤用は、おそらく学習者が中国語の“改正”をそのまま日本語にしたのであろう。しかし、日本語の「改正する」という語は「定まっている規則や法律などを改める」(デジタル大辞泉 <https://kotobank.jp/>) 場合に用いられ、中国語の“改正”の用法と異なっている。(21)の「担任する」は教師がクラスや教科を受け持つ意味によく使われる言葉で、市長の役目を引き受ける場合は「担当する」の方が適切である。これも“担任”という中国語をそのまま日本語に直訳した例である。

(22)の「成人」という言葉は、中国語では年齢だけでなく、社会的、精神的に成熟した一人前の人間を表すが、日本語の「成人」は、単に年齢が成人になった人のことを言う。学習者が中国語の“成人”をそのまま日本語にしたのだらう。(20)~(22)の例から見ると、いずれも中日両言語の意味的ズレに気が付かず、中国語をそのまま日本語にした誤用である。その意味的ズレは、教科書や辞書にはきちんとした説明が載っていないようである。

5.2.3 文体などに関わる誤用の下位分類と統計

ここでは、文体に関わる誤用と中国語語彙の使用について見る。

表12を見ると、文体に関わる誤用は、x3に8例見られ、すべて「文体的に共起しない」誤用である。x5においては、最も多かったのはやはり「文体的に共起しない」という誤用で、ほかの2項目にはそれぞれ1例しか見られなかった。次に「文体的に共起しない」誤用について、具体例を見よう。

(23) 初めは難しく感じました。でも今はだんだん適応できました（→慣

表12 文体などに関わる誤用の下位分類と統計

上位分類	下位分類	誤用の数		誤用例
		x3	x5	
Ⅲ 文体に関わる問題	ⅢA 文体的に共起しない	8	12	お互お互いにもっと寛容した(→認め合った)方がいいと思う。
	ⅢB 古い言葉	0	1	このような話しを聞くと、甘心(→納得)できない。
	ⅢC 特定分野の言葉	0	1	無私に自分を子供に奉献する(→献げる)親の愛は……
	合計	8	14	
Ⅳ 中国語語彙の使用	中国語をそのまま使用するもの	7	1	国民の素質を提高する(→高める)のに有益だ。
Ⅴ その他	どちらの分類にも入らないもの	0	2	

れてきました)。(x3, d0225, d26)

(24) 新しい時代に生存して(→生きて)いる私たちは国を越え、世界中の情報を身につけ、……(x5, d0894, d17)

(25) ブドリちゃんは親を失ったくるしみの中にいるかたわら、未来への不安を恐懼しています(→感じています)。(x5, j1128, a69)

(23) は恩師に近況を知らせる手紙文で、日常的なことを書いたやさしい文章である。(23)文には「適応する」という漢語を用いると、改まった感じを与え、違和感が生じる。「慣れる」という和語を使った方が適切なのに、学習者が中国語の“適応”をそのまま日本語に直訳した。(24)の「生存する」はやはり文章に堅苦しい感じを与え、違和感があるので、「生きる」という和語に直した方がよいと思われる。(25)の「恐懼する」は古い言葉で、日常的には用いられないので、文体的に共起しない。(23)~(25)の誤用を引き起こす原因を考えれば、二点ある。一つは、中日同形語の文体的ズレについての知識が欠けている。もう一つは、文体のズレがある中日同形語をそのまま中国語を日本語として使ってしまう。こうした誤用は上級レベルの学習者にも見られ、中日同形語の習得における難点の一つであると言えよう。

なお、「中国語語彙の使用」の誤用は、x3には7例あるが、x5には1例しかない。誤用例を一つあげておこう。

(26) 国民の素質を提高する(→高める)のには有益だ。(x3, d0276, d9)

6. まとめと教育的示唆

本研究は、日本語学習者コーパスに基づき、中国語話者学習者が産出した漢語サ変動詞の実態を調査、分析した。その結果、2グループのいずれも、漢語サ変動詞の正用率が90%以上にも達し、母語からの正の転移が強いことが明らかになった。また、学習者の習熟度が漢語習得に貢献していることが確認できた。一方、2グループに見られる主な誤用は、非文法的な文の産出、また、中国語をそのまま日本語に置き換えたことによる誤りである。誤用を引き起こす主な原因は、漢語サ変動詞に関する文法知識が欠けたり、日本語への理解が不足したり、中日両言語間のズレに気が付かなかつたりすることが考えられる。特に、両言語の文法的ズレ、意味的ズレ及び文体的ズレは、中国人学習者の漢語習得における乗り越え難い難関であることがわかった。今後さらなる研究が待たれる。

これまでの日本語教育においては、和語語彙を重視してきたが、これから、漢語語彙にも力を入れるべきだと考える。教科書や辞書には、漢語に関わる文法知識、類義語の使い分け、およびコロケーションについて、用例による説明が望まれる。また、学習支援ツールを開発し、中国人学習者が独学で漢語語彙を勉強できるように、よりよい学習環境をつくる必要があると思われる。

謝辞：本論文の作成に当たり、薛鳴教授から貴重なご意見を頂き、心より感謝を申し上げます。

参考文献

石川慎一郎 (2012) 『ベーシックコーパス言語学』 ひつじ書房。

- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (2010) 『言語研究のための統計入門』くろしお出版。
- 王燦娟 (2014) 「中国人日本語学習者に見られる日中同形語の誤用について—意味、品詞、共起の誤用をめぐって—」『東アジア日本語教育・日本文化研究』17, pp. 221-241.
- 大塚薫・李暉洙 (2001) 「韓国人日本語学習者の語彙認識に関する一考察—和語系統の語彙と漢語系統の語彙の提示方法に関する考察—」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』国立国語研究所, pp. 33-45.
- 加藤絵人 (2005) 「中国語母語話者による日本語の漢語学習—多言語話者との習得過程の違い—」『日本語教育』125, pp. 96-105.
- 河住有希子 (2005) 「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』7号, pp. 53-65.
- 木村新次郎 (1989) 「単語の性質 I」『ケーススタディ日本語の語彙』おうふう。
- 熊可欣・玉岡賀津雄・早川杏子 (2017) 「中国人日本語学習者の日中同形同義語の品詞性の習得—語彙知識・文法知識との因果関係—」『第二言語としての日本語習得研究』第20号, pp. 63-79.
- 佐治圭三 (1992) 『外国人が間違いやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房。
- 石堅・王建康 (1983) 「日中同形語における文法的ズレ」『日本語と中国語の対照研究』5, pp. 56-82.
- 陳毓敏 (2003) 「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について—同義語・類義語・異義語・脱落語の4タイプからの検討—」『平成15年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 174-179.
- 张建华・么恩鹏 (2020) 「《日语学习者书面语语料库》的特色、功能与使用」『汉日语言对比研究论丛』第11辑, pp. 289-304, 浙江工商大学出版社。
- 張麟声 (2008) 「中国語話者における日本語漢語語彙の習得について品詞性のずれに起因する習得の問題を中心に」Linguistics of kango (Japanese words of Chinese origin), Friday 14th and Saturday 15th March 2008, Université Paris Diderot-Paris7.
- 張麟声 (2009) 「作文語彙に見られる母語の転移—中国語話者による漢語語彙の転移を中心に—」『日本語教育』140, pp. 59-69.
- 菱沼透 (1983) 「日本語と中国語の常用字彙」『中国研究月報』428, pp. 1-20.
- 劉月華・潘文娛・故鞏著 (1983) 『实用現代漢語文法』外語教学与研究出版社 pp. 94-95.
- 宮島達夫 (1993) 「日中同形語の文体差」『阪大日本語研究』5, pp. 1-18.

張建華 Zhang Jianhua 中国上海交通大学元教授 専門：日本語学・日本語教育学